錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第３４７号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2021

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：現状は？ コロナ禍の大学入試
1年生 情報集中講義で進路を考える
二面：錦城の携帯ルールはいかに
錦城高校新聞 都最優秀賞を受賞！

どうなるコロナと大学入試

錦城生にインタビュー

新型コロナウイルスの影響は大学入試にも及び、オンライン上での面接といった新たな入試形態も今年は見られるようになった。実際に体験した3年生に話を聞くなど、錦城生の思いに迫った。

（編集部共同取材）

進路指導室でのオンライン面接を編集委員が再現した(山田功司先生協力)。本来学校での受験はイレギュラーなケースだ

入試の面接に新たな方法

新型コロナウイルスは、大学入試にも大きな影響をもたらした。特に大きかったことの一つは、筆記試験や面接をオンライン上で行った大学があることだ。編集部が調べたところ、オンラインを活用しての入試を行った大学は、神田外語大学、桜美林大学、東京女子大学、津田塾大学などがあった。

実際に体験した錦城生は

推薦入試でオンライン面接を経験した3年生のEさんとFさんに取材機会を得た。体験したオンライン面接の様子や感想をインタビューした。

Eさんは自宅で、Fさんは自宅に面接のできる環境が整わなかったために、錦城の進路指導室でオンライン面接を受けた。パソコンとマイク、カメラは錦城から用意されたそうだ。

オンライン面接を受けた感想をEさんは「対面でやる面接と比べ、相手に自分がどう見えているのかが気になるし、緊張感も違うので難しかったです」と話す。また「自分が話す時はパソコンのカメラに目線を向けるため、面接官の表情が見えないのが大変でした」とFさん。

2人がオンライン面接で特に意識したことは、目線や表情、声のトーンだそう。「事前練習は絶対にやった方がいいです」と口をそろえる。「パソコン越しだと対面でやるよりも目線や声のトーンの変化が目立ってしまうので、きちんと前を見る練習などをした方がいいと思います」とEさん。Fさんは「本番を意識して出来るので、練習はやっておいてよかったと思いました」と事前練習の大切さを語る。

2人にオンライン面接をする上でのアドバイスを聞くと「笑顔を大切にしてください」と教えてくれた。

オンライン入試に賛否両論

オンライン入試を受験するかもしれない、1、2年生の声を聞いた。

1年生のAさんは「面接中にネットの回線が落ちたらそこで終了、というルールの大学もあると聞きましたが、それは不平等だと思うので不安です」と話す。「オンライン上の面接と実際に対面してやる面接とは緊張感が違ってくるし、対面でやった方が良いと思います」と2年生のBさん。1年生のCさんは「大学から遠いところに住んでいる人でも、長距離の移動をしなくて済むので良いと思います」と期待を口にする。「コロナ禍の中でも、入試がきちんと行われているのは良いことだと思います」と2年生のDさんは語った。

山田先生に聞く 大学入試

進路指導部の山田先生はオンライン面接について、自宅や自分の学校などでリラックスして受験できることや、受験会場まで行く必要がないことは長所だと話す。一方、短所にはインターネット環境を整えなければならないことを挙げた。

また、このまま新型コロナウイルスの状況が続けば、オンラインで面接を受ける人が増えると考えられる。これから受験する人たちに向けては「声量、目線、カメラの角度など対面の時とは違う点を意識しなければなりません。慣れていないと戸惑うので事前に練習することが大事です」とアドバイスした。

「コロナは大学入試に大きな影響を与えました」

＊ ＊ ＊

新型コロナウイルスの影響で、大学入試に「オンライン」という新しい選択肢が増えた。大学入試改革なども相まって、変化の多い大学入試に不安を抱く錦城生も多いだろう。山田先生は「入試の仕組みは変わりますが、教わる内容は変わりません」と話す。勉強するときは「入試」という枠組みにとらわれすぎないようにしよう。

面接の流れ（Dさんが体験したもの）

開始30分前に画面の準備をする
←
開始時間ちょうどに画面が切り替わる
←
カメラで部屋全体を映し、第三者がいないことを面接官に見せる
←
携帯を見せ、録音していないことを示す
←
受験票を見せる
←
面接開始

進路選択へ「知る」一歩

12月12日(土)に1年生に向けた情報集中講義が、コロナ感染対策のもと実施された。今後の進路選択に向けて有意義な時間となった。

真剣に講義を聴く1年生

日常を数値化する「物理学」

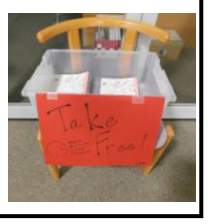
物理学の講義は東海大学研究推進部の小田慶喜さんによって行われた。物理学とは、普段生活する中で当たり前に思うことを数値化する学問だ。さらに、理科科目の基礎といわれ、化学や生物学でも活用されている。小田さんは「物理学を学ぶことでしか取れない資格が多くあるので、将来の幅を広げることが出来ます」と未来の可能性を示した。また「学校、学部は自分のやりたいことを専門にしている先生がいるかどうかで選んでください」と話した。

世界を広げる「語学」

語学部門の講師である国際基督教大学(ICU)の真保美帆さんは、英語の学び方や語学を学ぶ意義を説明した。オンラインでICUに在籍する先輩と連絡を取りながら講義を進めていった。実際にやり取りしたあるICU4年生の学生は「授業がほぼ英語なので、高校時代と違って新鮮でした」と話す。真保さんは「言語は思考のツールの一つです。有効活用することで、将来の可能性がもっと広がります」と語った。（甘・桜）

図書室でも部誌配布

文藝部部誌『天舞』が7階の部室前だけでなく、図書室のカウンター前にも置かれています。興味のある人はぜひもらっていってください！ 文藝部



続くオンライン授業 大学生の心境は？

錦城高校新聞では、休校期間中に大学生のオンライン授業について特集した(休校特別版第5号)。現在はどのような状況になっているのか、大学1年生である錦城の卒業生(55回生)2人に話を聞いた。

大石稜太郎さんの通う国立大学では、現在もオンライン授業が続いている。来年度も引き続きオンラインになる可能性が高いそうだ。オンライン授業のメリットを「いつでも先生の授業を反復できたり、自分の好きな時間に授業を受けられたりするところです」と話す。デメリットについては時間の制約がないことや、先生の顔が見えないこと、直接先生に質問ができないことを挙げた。大石さんは「オンライン授業だと授業感やライブ感がないというのが残念です」と語った。

オンライン授業を受けている大学生

荒川和穂さんが通う私立大学でも、オンライン授業は続いているそうだ。荒川さんはオンライン授業のメリットについて、通学の手間が省ける、提出課題や配布資料の履歴が残ることが多いので見落としが少ないという点を挙げる。その一方で、集中力が続かない、話し合いの場面で話し出すタイミングや空気感が掴みにくい、などのデメリットも口にした。荒川さんは「バズセッションという生徒同士の討論形式の授業が出来ず、他の生徒と意見交換しないと深まらないこともあると思うので、私は対面授業の方が良いと考えています」と語った。

躍進の文化部 快挙続く

将棋部 勝利を重ね全国へ

11月8日(日)に行われた令和2年度全国高文連将棋新人大会東京地区予選・関東大会地区予選にて、将棋部部員2人が好成績を収めた。両者ともに全国将棋新人大会への出場が決定した。

東京都2位に輝いた小沼紗弥さん(1A)は「都で2位になれて、素直に嬉しいです」と話す。大会は総当たり戦で行われ、同大会で4位となった平澤響さん(1L)との一戦もあったという。印象に残ったことは平澤さんとの対局で詰めの一手を指したことだという。全国大会に向けて「どんな相手でも真正面からぶつかっていきたいです」と語った。

また平澤さんは「1試合につき、1手を指すまでの時間が10分と決まっています。それを超えると30秒以内に指さないといけなかったので、難しかったです」と振り返る。これからものびのびと自分らしいプレーをしていきたいと語った。

文藝部 都大会で好成績

文藝部の部誌『天舞』が、11月23日(月)に行われた東京都高等学校文化祭文芸部門中央大会の部誌部門で最優秀賞を受賞した。今回の受賞で、来年度の全国高等学校総合文化祭に出場が決まった。

「多くの人に『天舞』を見てほしいです」

部長の濱田真帆さん(2K)は「部誌を作る過程で編集や校閲、印刷などのたくさんの作業があって、とても大変でした。だからこそ今回自分たちの部誌が評価されて嬉しいです」と話す。部誌を作成する上で工夫したことは、各部員の作品の表紙を統一したことなどだそうだ。濱田さんは「協力してくれた部員や先輩方、顧問の先生に感謝の気持ちでいっぱいです。これからもより良い部誌づくりに励んでいきたいと思います」と意気込んだ。

また、同大会の小説部門で田中政成さん(1D)が佳作賞に輝いた。結果を振り返り「今の実力を最大限発揮できたのでとても嬉しかったです」と笑顔で話す。受賞作『高い和食屋で出てくる野菜、美味いって言って食べるのやめる』は、田中さんが中学時代に体験したサッカー部時代のエピソードをアレンジしたものだ。当時の思いや後悔、顧問への感謝の気持ちを表現しているそう。今後に向けて「さらに小説を書く実力を上げて、錦城の文藝部をより盛り上げていきたいです」と語った。（桜・鷺）

むらさき草

「無駄なものはありません。受験で使わなくてもどこかで自分の力になる」。1年生のときの文理選択である先生言っていた言葉だ。確かにどんな教科でも勉強することで忍耐力は付くと思う。しかし、私にはわざわざその教科を選ぶ必要性が感じられなかった▼最近になり「無駄なものはない」という言葉の意味について新たに発見した出来事がある。中学生の頃に比べて映画が面白くなったのだ。例えば韓国の映画を見ていて、年上の人に対し見たことがないほど敬意を払っている場面を見ると「韓国は儒教の考え方があるからな」など。1年生のときに倫理で聞いた時は「へー」と思う程度だった知識が、今までは考えもしなかった視点から映画をもっと楽しめるものにしてくれた▼「ムダ」とは本来の目的とは違う所で自分を豊かにしてくれるものなのかもしれない。映画が面白くなる以外にも無駄と思われるものが役に立った話がある▼精神科医として活動したフロイトは、人の行動が潜在意識に左右されるという考えを導き出した。フロイトは患者への診察の際「最近うまく話せない」という相談内容だったとしても、家族構成を聞いたり、ただ患者が話したいことを話してもらう「自由連想法」という治療を行ったりしたという。この「自由連想法」を行うことによって患者は過去のトラウマを顕在化することができるそうだ。これは第三者から見ると、聞いていることは相談内容との関連性がないから「無駄」だと思われるだろう。しかし、フロイトの観点から見るとそのような「ムダ」な話の中に潜在意識にたどり着くヒントが隠れている▼このように「ムダ」が目的以外の場面で役に立った例だけではなく、直接仕事に生かされた例もある。自分が無駄だと思っていることでも、役に立たないとは限らない。「必要」と「ムダ」を区別することこそ本当に無駄なことではないだろうか。（卵）

大会報告

将棋部
11月8日(日)
▽将棋新人大会東京地区予選・関東大会地区予選
2位 小沼紗弥(1A)
4位 平澤響(1L)

男子バレーボール部
11月22日(日)
▽東京都高等学校6人制バレーボール男子新人大会決勝大会進出

文藝部
11月23日(月)
▽東京都高等学校文化祭文芸部門中央大会小説部門
佳作賞 田中政成(1D)
▽東京都高等学校文化祭文芸部門中央大会
部誌部門 最優秀賞

生徒会動静

11. 30〜12. 19
生徒会本部 随時活動中

学校内での携帯ルール どう考える

生徒会にインタビュー

現生徒会長、副会長が学校内での携帯電話の使用ルール緩和を公約に掲げている。今号では生徒会の今後の動きや、錦城の先輩方が実現させた携帯持ち込み認可への軌跡を特集する。

（編集部共同取材）

改正実現のために協力を

生徒会長の中村心咲さん（２F）と副会長の藤田和望さん（１I）が携帯の使用に関するルールの見直しを公約に掲げている。現在取り組んでいることについて藤田さんは「今ある規則のリストアップをしています。先日行われた生徒会会則改正に関する投票結果を３学期のできるだけ早い時期に公開して、それが終わったら校則の改正に向けて先生方に交渉する予定です」と話した。しかし、校内での携帯使用が相次ぎ、没収の頻度も高くなっているという。中村さんは「皆の協力が必要なので、正直残念ではありません」と心情を語る。また、藤田さんは「守らなくてもバレないという発想の人が多いと思います」と話した。また、没収の期間の短さにも問題があると考えているそうだ。

現状を踏まえ、最低限守ってほしいこととして「学校にいる間は携帯の電源を切って欲しいです」と中村さん。先生と連携した昼休みの見回りなど、具体的な取り組みについては今後先生と協議を進めていくという。藤田さんは没収の件数が大幅に減れば、ルール変更へ前向きな交渉に踏み込めるとし「先生方と連携して行う計画の内容について近いうちに発表する予定です」と話し、ルール改正に積極的な姿勢を見せた。

年	時期	改革内容
2014年		51代生徒会長率いる中央委員会が携帯持ち込みに向けて本格的に動き始める
2015年	1学期末	度重なる会談の末、試験期間を設ける方針に至るも、生徒が授業中に使用したことが発覚し、発表を目前にして計画は頓挫する
2016年	10月	再び議論が始まる。認可申請書案をまとめ、議決が取られ可決
同年	12月	携帯持ち込みの生徒会案について職員会議で話し合われたが結果は「継続審議」
2017年	4月19日	使用ルールが話し合われたのち、持ち込みが承認された

長きにわたる携帯持ち込み認可までの歩み

ルールを巡る先輩の奮闘

錦城で行われてきた携帯持ち込み認可への道のりを紹介する。

２０１４年に51代生徒会長の丸田和成さん率いる中央委員会が本格的に携帯持ち込み認可に向けて活動を始め、持ち込みの試用期間を設ける方針にまで至った。しかし一部の生徒が授業中に携帯で写真を撮り、その画像をＳＮＳに流出させるといった問題が起こり、没収が相次いだ。それにより、中央委員会は携帯持ち込み案を取り下げざるを得ない状況となってしまう。

再び議論が始まったのは２０１６年の１学期後半から。生徒会と代議員会が合同で会議を開き、認可申請書案をまとめ、10月に行われた代議員会で、各クラスの生徒と代議員による議決が取られ可決となった。

その後、持ち込み実現に向けて話し合いが進んだ。２０１７年１月、携帯電話持ち込みの生徒会案について職員会議で話し合われた結果、最終的に「継続審議」となった。２月には、１月の職員会議を経て持ち込み認可の方向で話が進んだ。校内での所持方法やルールを検討している段階であることが代議員会で報告された。

そして２０１７年４月19日（水）、ＬＨＲで行われた２、３年生徒集会で、53代生徒会長の高橋夏音さんと代議員長の髙坂美羽さんから職員会議での携帯電話持ち込み案の認可が発表される。代議員会やクラスでの審議を重ね、高橋会長の代で持ち込みは認可という結果になった。

携帯持ち込みの承認を伝えた錦城高校新聞の速報

こうして錦城では約４年間という長い年月をかけて生徒主体で携帯電話持ち込み認可が実現された。

生徒の意見はいかに

錦城生に携帯の校内での使用緩和について意見をインタビューした。Xさん（2年）は「携帯の緩和は必要だと思いますが、一度携帯の使用ルールを見直す機会をつくると良いと思います」と今後の生徒会の動きに期待を寄せる。

その一方で、Yさん（1年）は「やること自体は否定しません。しかし、実現するには相当マナーが良くならないと無理なので、厳しいと思います」と現状に対する見解を口にした。

また、Zさん（1年）は校内での使用緩和について「錦城生なら節度を守った使用ができると思うので賛成です」と話した。

＊ ＊ ＊

今期の生徒会では、校内での携帯の使用ルールに関する問題以外にも、セブン自販機の設置やコピー機の試験期間以外での使用認可など、より過ごしやすい学校作りに向け、様々な公約を掲げている。

今後も錦城高校新聞では、より良い錦城の学校作りに奮闘する生徒会の活動を追っていく。

新聞づくりのスキル向上を

他校の新聞部員と交流会

11月14日（土）、私立三輪田学園中学・高等学校で東京都高等学校新聞セミナーが行われ、編集部員が参加した。今回の講習のテーマは「見出し付け」。例年はグループを作って行っていたが、今年は新型コロナウイルス感染対策のため個人での作業となった。

講師は三輪田学園新聞特別委員会顧問の寺見忍先生が務めた。寺見先生は、どのようなことを見出しで伝えるかが大切だと話した。その後、各校のコロナ禍での活動で困っていることを共有し合った。

講習後、参加者の都立八王子桑志高校の黒澤吏玖さん（3年）に話を聞いた。黒澤さんはこのセミナーに4度参加し、社交性を身に着けることができたそうだ。「今年はコロナの影響で1回なくなったので、今回開催されて嬉しかったです。また、他校が今どのように活動しているのか知れて良かったです」と語る。

寺見先生は「セオリーに縛られない見出しが多くあり、面白かったです。今後の活動でも、良い見出しを作れるよう頑張ってください」とメッセージを送った。

表彰状を受け取る編集部員

錦城高校新聞都1位を受賞

セミナー内で第36回東京都高等学校新聞コンクールの表彰式も行われた。錦城高校新聞委員会は13年連続で最優秀賞を受賞し、来年度開催される和歌山総文祭への参加が決定した。委員長の山﨑琉花さん（2G）は「コロナ禍でも最優秀賞をもらえてとても嬉しいです。今後も錦城生の『今』を届けるクオリティの高い新聞を作っていきたいです」と意気込んだ。（甘）

元気に冬休みを過ごすために

こまめな手洗い・うがい・消毒・換気
に加え、加湿も忘れずに！
感染症対策を徹底しよう

華やかな音楽響く視聴覚教室

11月17日(水)にルネこだいら大ホールで1、2年生を対象とした視聴覚教室が開催され、音楽グループ「Dualis Music」の演奏を楽しんだ。今年度はコロナ感染対策のため、学年ごとに時間をずらして行われた。

音楽が始まると同時に幕が開き、1曲目の「乾杯の歌」が始まる。Dualis Music のメンバーによって、次々と披露されるクラシックやミュージカルの名曲の数々に圧倒される錦城生。明るい曲調に合わせ、途中には手拍子をする場面もあった。

この日一番の盛り上がりを見せたのは、タレントの松岡修造がメインヴォーカルを務める曲「CANDO」。本来、クラシックのコンサートの最後には「ブラボー!」と叫ぶが、感染対策のため今回は拍手だけという形になった。曲が終わるとこの日一番の拍手が鳴り響き、会場は熱気に包まれた。

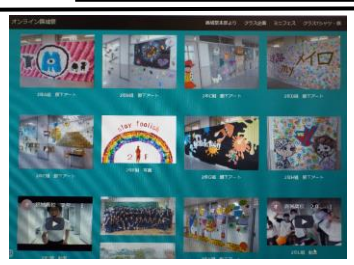
Dualis Music は今年、新型コロナウイルスの影響で今回が今年初めての公演だったという。錦城生は終始多彩な音色に心を惹かれ、今回の公演を楽しんでいた。（抹）

美しい音色と華やかなドレスで会場を魅了する

今年ならではのオンラインミニフェス

9月28日（月）、29日（火）に錦城祭の代替行事としてミニフェスが、新型コロナウイルス感染防止対策のため在校生のみで行われた。

それに対し、参加できなかった保護者や中学3年生向けに11月26日（木）から12月15日（火）まで特設ＨＰでミニフェスの一部が公開されていた。ＨＰでは、クラスの作品として、廊下アートなどの写真、動画作品やミニフェスに参加したクラブの企画、選別されたクラスＴシャツ・クラス旗を見ることができた。クラス企画の動画作品の一つとして、瑛人の『香水』や米津玄師の『Lemon』の動画のものまねをしていた２年Ｉ組などがあった。


オンラインミニフェスのＨＰ

錦城祭実行委員会の本部の生徒は、オンライン上に載せるクラスＴシャツ、クラス旗の選別を主に行ったそうだ。

錦城祭実行委員長の渡邊沙羅さん（２A）はオンライン上で開催できたことについて「お越しいただきたかった保護者の皆さん、中学３年生に少しでも見てほしかったので、良かったです」と話す。渡邊さん自身は、特にクラス企画での動画が印象に残ったそうだ。

渡邊さんは「各クラスが短い期間で一生懸命に作成してくれた作品が展示されていたので、たくさんの人が見てくれていたら嬉しいです」と話した。（雀）

クリスマスに最高の音色を

室内楽部

12月19日（土）にルネこだいら中ホールにて室内楽部によるクリスマスコンサートが行われた。部長の永村美幸さん（2F）は「ミニフェスからクリコンまでの期間が短かったのですが、後輩の技術と意識を高められるように頑張りました」と話す。12月20日（日）に、ルネ小平にて室内楽部がクリスマスコンサートを行った。クリスマスにまつわる様々な曲をはじめとする12曲を披露し、会場を大いに盛り上げた。マライア・キャリーの「All I Want for Christmas is You」やジングルベルなどのクリスマスの代名詞ともいえる曲の演奏後には、会場は拍手喝采となった。

部員全員がサンタの帽子を被って会場をクリスマス気分に

吹奏楽部

吹奏楽部は12月20日（日）にルネこだいら大ホールで「Christmas Concert」を開催した。例年に比べて短い練習時間の中、懸命に練習してきたそうだ。第1部はクラシックステージ。3曲目、歌舞伎をイメージした和の曲調が特徴の『吹奏楽のための『風之舞』』が1部の最後に盛り上がりを見せる。一体感のある迫力にあふれた演奏で観客を惹きつけた。第2部では曲中の振りや、ソロパートが演奏を彩り、終始観客を魅了する。クリスマスらしい賑やかで明るい曲の数々で冬の寒さを感じさせない暖かいコンサートとなった。

錦城文芸 囲碁大会で活躍する錦城生

東京都高等学校文化祭第33回囲碁大会で3位となった渕上和克さん(1F)。「優勝出来なかったことはとても悔しいです。しかし、大会が開催されるという発表から開催までの時間がない中では良い成績を取れたと思います」と振り返る。今回の大会には自分で調べて応募したという。渕上さんは、中学3年生の時に全国大会に出場できる予定だったが、新型コロナウイルスの影響でなくなってしまって悔しかったそうだ。その時の気持ちを胸に今大会に臨んだと話す。

渕上さんが囲碁に出会ったのは5歳のときで、地元のおじいさんたちが趣味で囲碁を打つ集まりに参加したことがきっかけだ。そこで初めて碁を打ったのが、とても楽しかったという。たくさん碁を打つたびに強くなることができ、その後、プロ棋士を目指していた時期もあったそうだ。普段は勉強や部活で時間がないため、あまり碁を打つことができないという渕上さん。それでも、時間が空いたときはインターネットの囲碁ソフトを使って練習している。渕上さんは「答えのない次の一手を自分で導き出すことができるので、とても楽しいです」と囲碁の魅力を語った。最後に「今後の大会も自分で調べて参加していきたいです。次に参加するときには、優勝を目指して頑張りたいです」と意気込んだ。（甘）

囲碁の魅力を語る